

「ビザンティン・コモンウェルス」論再考 (2)

— 政治統合の視点から —

唐澤 晃一

1. はじめに

本論では、ビザンツ帝国と南スラヴ人（セルビアやブルガリア、ボスニアのスラヴ人）の政治交流について、D. オボレンスキーが1970年代に提示した「ビザンティン・コモンウェルス」論¹の妥当性を、ビザンツ側とスラヴ側の一次史料と先行研究にもとづいて再検証し、ビザンツ世界における政治交流の実態とメカニズムについて考えたい。

前稿において、オボレンスキーの「ビザンティン・コモンウェルス」論を概観し、これにたいするブラウニングとプリンツィンクによる批判を紹介したうえで、ビザンツ皇帝が南スラヴ人にたいして行使した上級支配権（国外遠征時の従軍要請やアルコン＝ジュパン任命権、人質の供出要請など）の状態を9世紀から14世紀まで、概観した²。「ビザンティン・コモンウェルス」とは、中心をコンスタンティノーブルにおき、東ヨーロッパやロシアなど、ビザンツ帝国と政治・文化交流がある地域を外縁とする国際的な共同体のことである。この共同体に共通の特色は、そこに住む諸民族がビザンツ皇帝の政治的・文化的な優越性を認め、キリスト教世界にはコンスタンティノーブルにいる「ローマ人の皇帝」以外の皇帝は存在しないと認識していたことにある。このように、ビザンツ皇帝が「非常に大きな特権」、あるいは「政治的な主導権」を有していたために、それが中世東ヨーロッパの、つまり正教世界の民族意識の形成に少なからず影響を与え、こうした地域において民族意識の形成が遅れた原因となったとするのが、オボレンスキーの論である³。この論にたいしては、1970年代にブラウニング、プリンツィンクによる批判が書評においてなされた⁴。ただし近年では、シェパードによる一連の論考が示すように⁵、少なくともバルカン半島

¹ オボレンスキーの「ビザンティン・コモンウェルス」論にかんする研究は、次の通りである。*Byzantium and the Slavs: collected studies*, London 1971, *The Byzantine Commonwealth: Eastern Europe, 500-1453*, New York 1982, *The Byzantine Inheritance of Eastern Europe*, collected studies, London 1982（以下、Obolensky, *The Byzantine Inheritance*. と略）, *Six Byzantine Portraits*, Oxford 1988.

² 拙稿「『ビザンティン・コモンウェルス』論再考（1）－ビザンツ・東ヨーロッパ世界モデルの可能性－」、『エクスラシス』第9号、2019年、75-91頁。

³ D. Obolensky, “Nationalism in Eastern Europe in the Middle Ages”, in: Obolensky, *The Byzantine Inheritance*., chapter XV, 16.

⁴ ブラウニングとプリンツィンクによる書評については、以下を参照されたい。*English Historical Review*, vol. 87 (1972), 812-815.; R. Browning, *Byzantinische Zeitschrift*, Bd. 69 (1976), 101-104.; G. Prinzing.

⁵ J. Shepard, “A Marriage too far? Maria Lekapena and Peter of Bulgaria”, in: J. Shepard, *Emergent Elites and Byzantium in the Balkans and East-Central Europe*, London, Variorum Reprint, 2011, chapter V, 121-149, “Crowns

にかんする限り概ね肯定的に評価されている。

前稿では、「ビザンティン・コモンウェルス」論をめぐる近年の、とりわけ 2000 年以降の研究動向や、皇帝の上級支配権、すなわち、南スラヴ人への従軍要請や、アルコン＝ジュパン任命権、人質の供出要請について、立ち入って検証することはできなかった。そこで本稿では、一次史料を再度、検討し、前稿の修正と補足をおこなう。次に、ビザンティン・コモンウェルスの政治交流が、もっとも活発かつ緊密に展開されていたと考えられる 10 世紀ブルガリアの例を検証し、これを 14 世紀におけるセルビア、次いでブルガリアの例と比較検証してみたい。以上から、本稿では、ビザンツと南スラヴ人の政治交流の実態を、ビザンツ皇帝が行使した上級支配権を柱とする政治的規制力の観点から検討し、ビザンツ世界の政治統合の実態を明らかにしたい。

2. 2000 年代以後の研究動向

ビザンツ帝国と南スラヴ人の政治交流については、史料が少ないにもかかわらず、近年においてもある程度まで盛んに研究がおこなわれている。たとえば、ブルガリアではビリャルスキ(1998、2011 年)がビザンツ帝国とバルカン諸国における官制の比較研究⁶を、ニコロフ(2011 年)が、中世ブルガリア人からみた「ビザンツ人」のイメージにかんする研究をおこなっている⁷。セルビアでは、マクスイモヴィチ(2008 年)が、中世セルビアにおけるビザンツ帝国の政治思想や税制・官制の受容について著書をまとめている⁸。またスタンコヴィチ(2013、2016 年)は、11 世紀から 14 世紀におけるビザンツとセルビアの政治関係を再検証し、この地においてビザンツの政治的影響力、あるいは軍事的プレゼンスが 1217 年の王国成立後も、従来考えられてきた以上に強かったことを明らかにした⁹。

from *basileus*, Crowns from Heaven”, in: Shepard, *ibid.*, chapter IX, 139-159(以下、Shepard, “Crowns from *basileus*.” と略) , “Slavs and Bulgars”, in: Shepard, *ibid.*, chapter II, 228-248, “Spreading the Word: Byzantine Missions”, in: Shepard, *ibid.*, chapter I, 1-17, “Symeon of Bulgaria - Peacemaker”, in: Shepard, *ibid.*, chapter III, 1-53(以下、Shepard, “Symeon of Bulgaria.” と略) , “The Ruler as Instructor, Pastor and Wise: Leo VI of Byzantium and Symeon of Bulgaria”, in: Shepard, *ibid.*, chapter IV, 339-358(以下、Shepard, “The Ruler as Instructor.” と略) .

⁶ И. Билярски, *Институциите на средновековна България*, София 1998, I. Biliarsky, “St. Peter (927-969), Tsar of the Bulgarians”, in: *State and Church: Studies in Medieval Bulgaria and Byzantium*, V. Gjuzelev, K. Petkov (eds.), Sofia 2011, 173-188 (以下、Biliarsky, “St. Peter (927-969).” と略) .

⁷ A. Nikolov, “The Perception of the Bulgarian Past in the Court of Preslav around 900 AD”, in: *Ibid.*, 157-172.

⁸ Љ. Максимовић, *Византијски свет и Срби*: collected studies, Београд 2008.

⁹ V. Stanković, “Rethinking the Position of Serbia within Byzantine Oikoumene in the Thirteenth Century”, in: *The Balkans and the Byzantine World before and after the Captures of Constantinople, 1204, and 1453* (以下、*The Balkans and the Byzantine World*. と略) , V. Stanković (ed.), New York-London 2016, 91-102, “The Character and Nature of Byzantine Influence in Serbia (from the end of the Eleventh to the

ボスニア・ヘルツェゴヴィナとクロアチアでは、13世紀以後、ビザンツ帝国の政治的影響力は次第に弱まっていったが、それでも、ムルギッチ（2016年）の論考にみられるように、中世ボスニア国家におけるビザンツ帝国の政治的影響力の強さについて論じようとする視点はみられる¹⁰。また、ロヴレノヴィチによる論考（1999年）も、コトロマニッチ朝ボスニア王国の国制について論じながら、この国を、西欧に属するハンガリー王国と、ビザンティン・コモンウェルスの一部であるセルビアの狭間で発展した地として描こうとしているように見える¹¹。クロアチアにおいては、ダルマチアにおけるビザンツ帝国の行政制度について論じたフェルルガの研究（1978年）がすでにあるが¹²、ゴールドステイン（1995年）にみられるように、コムネノス朝時代におけるビザンツ皇帝とこの地の関係について論じたものも出ている¹³。

以上のように、近年におけるビザンツ＝南スラヴ人の政治交流史は、全体としてはオボレンスキーが提示した「ビザンティン・コモンウェルス」論を継承しつつ、ビザンツ世界の政治統合や文化統合の実態を各論において補完する方向で推移しているといえる。

では、オボレンスキーの「ビザンティン・コモンウェルス」論は、近年ではどのように評価されているだろうか。「ビザンティン・コモンウェルス」論が提示されたのは、1971年であった。その後すぐ、1972年には中世東ヨーロッパ諸民族（ここでオボレンスキーは正教世界の東ヨーロッパを論の中心に据えている）の民族意識とビザンティン・コモンウェルスの関係について論文を発表した。また、1988年には、著書『6人のビザンツ人の肖像』において、コモンウェルスの政治・文化統合を強める役割を果たした6人の君主や聖職者について論じている。

著書『ビザンティン・コモンウェルス』の公刊後、1970年代には、欧米の研究誌において、管見の限りでは計10本の書評が寄せられている。このうち、チャラニス（1972年）、ニコル（1972年）、ブラウニング（1972年）、ファイン Jr.（1974年）、プリンツィンク（1976年）による5本はとくに重要と考えられる¹⁴。中でも、ビザンツ帝国の政治的優越性（とりわけ皇帝の上級支配

end of the Thirteenth Century): Reality-Policy-Ideology”, in: *Serbia and Byzantium*, Proceedings of the International Conference Held on 15 December 2008 at the University of Cologne, M. Anger, C. Sode (eds.), Frankfurt am Main 2013, 75-94（以下、Stanković, “The Character.” と略）。

¹⁰ J. Mrgić, “The Center of the Periphery: The Land of Bosnia in the Heart of Bosnia”, in: *The Balkans and the Byzantine World.*, 165-181.

¹¹ D. Lovrenović, *Ugarska i Bosna (1387-1463.)*, doktorska disertacija, Sarajevo 1999.

¹² J. Ferluga, “Das byzantinische Reich und die Südslawischen Staaten von der Mitte des IX. bis zur Mitte des X. Jahrhundert”, in: J. Ferluga, *Byzantium on the Balkans: Studies on the Byzantine Administration and the Southern Slavs from VIIth. to the XIIth. Centuries*, Amsterdam 1978, 291-336.

¹³ I. Goldstein, “Byzantine rule in Dalmatia in the 12th Century”, in: *Byzanz und Ostmitteleuropa, 900-1453*, Beiträge zu einer table-ronde des XIX International Congress of Byzantine Studies, Copenhagen 1996, G. Prinzing, M. Salamon (Heraus.), Wiesbaden 1999, 97-125.

¹⁴ チャラニス、ニコル、ファイン Jr. による書評は、次を参照されたい。Balkan Studies, vol. 13, no. 1 (1972), 163-165.; P. Charanis, *Byzantine Studies*, vol. 1 (1974), 78-84.; John V. A. Fine Jr., *Byzantinoslavica*, vol. 33

権を核とする政治的な主導権)と、その文化的優越性の区別を説くブラウニングの主張や、13世紀以降におけるビザンツの政治的弱体化を背景として、ブルガリア、セルビアが台頭したことによって政治的多極化がもたらされたことを説くプリンツィンクの指摘は、現在においても有効と考えられる。そのさいプリンツィンクは、13世紀以降のこれらの周辺諸君主が、アプリオリにビザンツ皇帝やコンスタンティノープルの政治的至高性を認めていたのではなく、現実の情勢を判断しながら、政治的決定を下していったと指摘している。

しかし「ビザンティン・コモンウェルス」論の主要な論点は、現在においても肯定的に評価されている。たとえば、ビリャルスキは論文「聖ペタル(927-969年)ーブルガリア人の皇帝ー」(2011年)の中で、第一次ブルガリア帝国の皇帝ペタル一世をめぐる崇拜を、ビザンツ世界でおこなわれていた君主崇拜の文脈に位置づけて検証し、これを「ビザンティン・コモンウェルス」の文化的紐帯を示す好例と指摘する¹⁵。

次にシェパードも、論文「バシレウスからの冠あるいは天上からの冠」(2007年)において、第二次ブルガリア帝国とセルビア王国の諸君主が、14世紀以前は、天上から王冠(あるいは帝冠)を授与されるという政治思想を表明することを「控えて」きたとみなし(それは、なぜならばそのような事実を示す記述史料や絵画資料が存在しないからであるが)、そこに「ビザンティン・コモンウェルス」の「シルエット」があらわれている、と述べる¹⁶。シェパードの論については稿を改めて紹介したい。

一方、スタンコヴィチは、セルビア王国の成立(1217年)を、ビザンツ帝国からの分離独立という視点だけではなく、ビザンツ世界の政治統合という視点から捉えなおしている(2008年)¹⁷。ビザンツ皇帝マヌエル一世の没(1180年)後からセルビア王国成立に至る一連の経緯を、ビザンツの弱体化の進行過程ととらえるのではなく、ビザンツの政治的優位性の緩やかな後退とみなす視点は、シンプソンによって唱えられてきたが¹⁸、スタンコヴィチは、この視点を、王国成立後から14世紀初めにいたるまでの両国の関係にも適用している。そして12世紀以前におけるビザンツ帝国の南スラヴ人にたいする政治的優位のうち、何が残されたのかを問いかけようとしている。そのさいスタンコヴィチは、オボレンスキーの著作『6人のビザンツ人の肖像』を引用しながら、中世セルビア＝ビザンツ関係史について、ビザンツ世界の政治統合の視点から、更なる説明が必要であると説いた。

上記のような研究が、ユーゴスラヴィアの解体(1991-1992年)と六つの共和国の独立後、10年を過ぎた時期に現れ始めた背景には、これらの国の研究史においても、独立当初の高揚が過ぎ

(1972), 235-237.: D. M. Nicol.

¹⁵ Biliarsky, "St. Peter (927-969).", 174.

¹⁶ Shepard, "Crowns from *basileus*.", 159.

¹⁷ スタンコヴィチの論点については、註9を参照されたい。

¹⁸ A. Simpson, "Byzantium's Retreating Balkan Frontiers during the Reign of the Angeloi (1185-1203): A Reconsideration", in: *The Balkans and the Byzantine World.*, 3-22.

去りつつあり、自国がより大きな世界の一部であることも認識されつつある事情を反映しているのではないだろうか。いずれにせよ、オボレンスキーが提示した論は、ある一つの世界において政治統合や文化統合がいかにしてなされ、それが時代とともにどのように変容したかを考察するうえで、重要な示唆を含むものであることはたしかである。以上から、政治統合の観点からも、ビザンツが政治的に弱体化したとされる14世紀の段階も含めて、いま一度、検証する価値はある。

3. ビザンツ皇帝の上級支配権 —前稿の補足—

ビザンツ皇帝の南スラヴ人にたいする政治的主導権について考えるさいには、普遍的統治権のうちの実質的な部分、すなわち上級支配権についての厳密な分析が必要と考えられる。ここでは、前稿で論じた、10世紀から14世紀までの上級支配権の状態について、前稿では扱いえなかった例もあげながら、若干の補足をおこない、前稿において提示した全体像の見取り図を修正しておきたい。前稿では、ビザンツ皇帝の南スラヴ人にたいする上級支配権を、従軍要請とアルコン＝ジュパン任命権に分類して検討した。いくつかの例を詳しく検討した結果、13世紀以降にも、ビザンツ帝国の上級支配権の少なくとも一部が残存していることが明らかとなった。

9、10世紀のビザンツ世界は、ビザンツ皇帝を中心とし、一連の臣従国によって構成される政治秩序のなかで、皇帝の上級支配権が実質的に機能していた時代であった。870年～871年にバシレイオス一世が実施したバーリへの遠征には「クロアチア人、セルビア人」をはじめとする部族長が従軍していた。この点について、10世紀の『帝国統治論』は、次のように記している。

「〔フランク人の〕王と教皇は、皇帝の要求に譲歩し、双方とも、大軍とともに皇帝から派遣された軍に、また、〔皇帝に従軍している〕クロアチア人、セルビア人、ザカルミア人の部族長に、そしてテルボニア人、カナリア人、ラグーサの者たち、ダルマチアの城砦から来たすべての者たち（これらの者たちは全員、皇帝の命によって来ていた）に合流した」¹⁹。

このように、これらの南スラヴ人はマケドニア朝の「皇帝の命」のもとで、ビザンツ帝国の国外遠征に従軍していた。従軍要請が実効力を有していたことは、それに従わない部族長にたいし、ビザンツ皇帝が罰令権を行使していたことからわかる。次の記述は、同じ『帝国統治論』にあり、南スラヴ人のパガニ族ならびにナレンタニ族にたいするビザンツ皇帝の罰令権についてのものである。

「〔パガニ族とナレンタニ族の者で〕ダルマチアの城砦に住む自立した部族長は、ローマ人の皇帝にであれ、また、他の誰にであれ、従わなかった。そこで、しばらく後に、皇帝バシレイオス、すなわち御名麗しき、御世とこしえなる皇帝の下に、アフリカからはサラセン人が、またソルダノス、サヴァ、ならびにカルフォスが、艦船36隻とともに来て、ダルマチアを

¹⁹ Constantine Porphyrogenitus, *De Administrando Imperio*, G. Moravcsik (ed.), R. J. H. Jenkins (trans.), Washington D. C. 1967, 128.

掌握し、ブドヴァの城砦、〔中略〕その南岸を略奪した」²⁰。

この時代には、上記の、ネレトヴァ川河口付近に住むナレンタニ族の場合のように、ビザンツ皇帝は「皇帝の命」に従わない部族にたいし罰令権を行使することができた。だからこそ、南スラヴの諸部族は、ビザンツ帝国に敵対する勢力と交戦状態になると、進んでビザンツ帝国の利益になるような行動をとったのである。

「〔セルビア侯は〕すぐにローマ人の皇帝の良き行いを思い出し、ブルガリア人と戦い、万事彼らに従うよりも、むしろローマ人の皇帝に支配されることを望んだ。スィメオン〔王〕がセルビア人にたいして〔将軍の〕マルマエムとシグリツェス〔ならびに〕テオドロスを派遣したので、〔彼らと戦い〕戦場から、〔その〕首と戦車を、勝利の証としてローマ人の皇帝に送った」²¹。

ビザンツ側もこうした行動を無償で期待しえたわけではなかった。彼らに贈り物を与え、敵対国と交戦させる方策をとることもあった。「ローマ人の皇帝は、セルビア侯ペタルに贈り物を与え、トルコ人〔すなわちマジヤール人〕に立ち向かわせた」²²。こうした、ビザンツ皇帝の従軍要請は、少なくとも13世紀始めまではおこなわれていた。また、それ以後についても、実効力については不明であるが、ビザンツ側ではその権利があると考えられていた。

「もし〔皇帝マヌエル一世が〕西方で遠征をおこなうときには、かれ〔セルビア侯ウロシュ二世〕は二千人〔の兵士〕とともに皇帝に従うことに同意した。またアジアで戦いがある時には、すでに以前からの慣わしである三百人に加え、二百人を派遣するであろう」²³。

「以前からの慣わしであった」という言葉が示すように、セルビア人は従来、ビザンツ皇帝がおこなってきたアジア遠征に従軍するよう義務づけられていたことが分かる。以上の文言は、1149年、1150年と続けてなされたマヌエル一世によるセルビアへの懲罰遠征の結果、ウロシュ二世がおこなった宣誓の内容である。この遠征は、ウロシュ二世がハンガリー人と同盟を結んで対ビザンツ遠征を企図したためにおこなわれた。そのさい、ウロシュ二世は、マヌエル一世にたいし臣従礼をとっている。

「大ジュパン〔ウロシュ二世〕は跪き、そこで皇帝の足元に身を投げ、自分の約束を神にかけて誓い、永遠に自分がローマ人に属することを誓った」²⁴。

このアジア遠征のさいにおける従軍義務は、13世紀末にも有効であるとみなされていた。スタンコヴィチがあげる例によれば、1254年のゲオルギオス・アクロポリテスの記述に、ネマニッチ朝（1201～1371年）の王であるウロシュ一世が、上記と同様の従軍要請に応える義務を有し

²⁰ *Ibid.*, 126.

²¹ *Ibid.*, 158.

²² *Ibid.*, 156.

²³ Joannes Cinnamus, *Epitome Rerum Ab Ioanne Et Alexio Comnenis Gestarum*, vol. 26, Bonnæ 1836, 113.

²⁴ *Ibid.*

ていた、とある。それによれば、ウロシュー一世は、先の皇帝（ヨハネス三世バタツツェスカ）のドゥーロス（奴隷）であり、その祖先、すなわち大ジュパンが100年前に遂行していたのと同様に兵を供出する義務を有していた²⁵。

ただ、ネマニッチ朝期には、ビザンツ側の記述では、「皇帝の命」はみえにくい。ニケフォロス・グレゴラスの史書『歴史』では、ビザンツ皇帝は戦争のさいにネマニッチ家と「同盟」を締結し、同家から「軍隊の援助」ならびに「援軍」があったという記述が目立つ。以下では、そうした例について、概観してみる。

1327年に、ビザンツ帝国において帝位をめぐる内乱が生じた時、アンドロニコス二世はデチャンスキ王に支援を要請している。

「それだけでなく、かれ〔アンドロニコス二世〕は、セルビア人の王、そして自分の息子である専制公のデメトリオスに、援軍にかんする極秘の書簡を送った」²⁶。

「その後、〔アンドロニコス二世は〕そこから、セルビア人の王〔デチャンスキ〕が派遣した援軍とともに、アンドロニコス若帝〔アンドロニコス三世〕と戦うために、急行した」²⁷。

「つまり、そこでそうしたことが起こっていたが、セルビア人の王からまもなく援軍が到着するはずであった」²⁸。

1352年に、ドゥシャンがビザンツ皇帝ヨハネス五世とヨハネス六世の内乱に参加したさいにも、ビザンツ側の史料ではビザンツ皇帝が「同盟」により軍の派遣を要請したと記されている。

「皇帝パライオロゴスは、こうしたことを知ったので、〔中略〕同盟のためにトリパロイ〔セルビア人〕の王に使節を派遣するのが重要だと考えた」²⁹。

「このため、〔ヨハネス六世〕カンタクゼノスは、敵を攻撃するために以前にもましてオルハンから野蛮人の軍団を要請し、他方では、できるだけ十分に装備を施して、他の自分たちの軍団に、一致して敵にあたるよう命じた。あるいは、トリパロイの同盟軍に、途中で奇襲をかけることを命じた」³⁰。

こうした例では、かつての「皇帝の命」による従軍要請は「同盟」にもとづく要請や「援軍」の要請に置き換えられている。

しかし、一方で、スラヴ側の史料では、12世紀以前の、「皇帝の命」による従軍要請の痕跡も認められる。1312年におけるアンドロニコス二世からミルティン王への、アジア遠征のさいの従軍要請がそれである。この出来事について、ニケフォロス・グレゴラスは「使者を送り、軍隊

²⁵ V. Stanković, "The Character and Nature of Byzantine Influence in Serbia", 91.

²⁶ Nicephori Gregorae byzantine historia, graece et latina, L. Schopen (ed.), Bonnae, vol. 1 (1829), 394.

²⁷ Ibid., 395.

²⁸ Ibid., 397.

²⁹ Nicephori Gregorae byzantine historia graece et latina, L. Schopen (ed.), Bonnae, vol. 3 (1855), 178-179.

³⁰ Ibid., 179.

の援軍を求めた」と記している³¹が、ダニール二世による『セルビアの諸王ならびに諸大主教の伝記』の中にも、「ミルティン伝」にこれに対応する記述がある。

「皇帝〔アンドロニコス二世〕は、この偉大な王ウロシュに使節を派遣し、次のように述べた。〔中略〕彼ら、悪意をもつペルシア人は神から授かった国にいる汝に打ち勝ち、他の諸地方も占領するだろう。彼らは、強大な汝を滅ぼし、さらなる軍をそこに残し、きわめて大きな悲しみを我らが帝国に与えるだろう。彼らの攻撃はすさまじいので、我らは彼らにあらがうことができない。時間がたてば、私自身の頭〔すなわち身体〕にさえ、大きな危害が及ぶであろう。〔中略〕敬虔にして、キリストを愛する汝の王国が、急ぎ、大いなる怒りとともに、すぐに彼らの行く手を遮り、我らを苦しめるこの苦境から彼らを撃退することを願い、確信するものである。何かに責めを負わせることがないように〔来てもらいたい〕」³²。

上記の、「急ぎ」軍を派遣するように、あるいは、そのさいにミルティン王が「何かに責めを負わせることがないように」という表現から考えて、軍の派遣要請のさいの上位性はビザンツ皇帝にあるようにみえる。この解釈は、この従軍要請にたいする、ミルティン王の対応とも整合する。

なぜならば、ダニール二世は同王が、「ほんの少しさえ遅れることなく」軍団を召集した、と述べているからである。

「偉大なる王は、義理の父であるギリシア人の皇帝の、こうした言葉を聞いて、お互いの間にあるこれほど計り知れぬ愛のゆえに、ほんの少しさえ遅れることなく、ただちに自分の国にいるすべての軍団を集めた」³³。

ここでダニール二世が、ビザンツ皇帝の上位性を念頭においていたとすれば、それは、観念上のものであったのだろうか。それとも、こうした記述は当時のビザンツ皇帝がセルビア王にたいし、いぜんとして何らかの軍事的強制力を有していたことを示すのだろうか。14世紀のビザンツ皇帝が、従軍要請に従わない南スラヴの諸君主にたいして罰令権を行使できたかどうかは、今後、史料を検討しつつ、考えていきたいが、14世紀にも、「皇帝の命」にもとづく上級支配権の一部は残されていたと解釈することができる。

以上に、ビザンツ皇帝の従軍要請について、前稿の補足を試みた。同じくビザンツ皇帝が行使する上級支配権のうち、アルコン＝ジュパン任命権については、前稿である程度まで論じることができたので、本稿ではさしあたり再論することはしない。ここでは、このアルコン＝ジュパン任命権と連動する、コンスタンティノープルへの人質供出について、触れておきたい。

首都コンスタンティノープルへの、南スラヴ人の人質供出義務は、古くは、9世紀ブルガリアのシメオンの例があり、おそらくさらに古い時期までさかのぼると考えられるが、それは、ビ

³¹ Ibid., vol. 1, 263.

³² Животи краљева и архиепископа српских, Архиепископ Данило Други, Ђ. Даничић (ed.), Загреб 1866, 146.

³³ Ibid.

ザンツ帝国の政治的弱体化が明らかな、14世紀にも行われていた。

たとえば、ミルティン王は、反乱を起こした息子のデチャンスキを、眼を潰したうえでコンスタンティノープルに差し出している。

「この敬虔な王ウロシュ〔ミルティン〕は、自分が眼を潰した息子〔デチャンスキ〕を栄光の都市コンスタンティノープルへ送り、当時、義理の父であった、聖なる、普遍皇帝のアンドロニコス陛下に差し出した」³⁴。

そのさい、同王はデチャンスキの二人の息子とともに同都へ送っている。

「〔ミルティン王は〕かれ〔デチャンスキ〕を、その二人の息子であるドウシャンとドウシツアとともに差し出した。敬虔な皇帝アンドロニコス陛下のもとへ連れていかれると、皇帝は、彼らを世話するよう命じられ、ある皇帝の館を住まいとして与え、必要なものは何でも与えるようにと述べられた。そして、この地で何人かの従僕とともに多くの年月を過ごした」³⁵。

こうした人質は、10世紀の場合、国元で内乱が起ると、ビザンツ皇帝は彼らをそこへ派遣し、支配者に据えることがあった。では、ネマニッチ家の場合、どうなのか。ここでは、上述の、デチャンスキの例をみえる。ダニール二世の後継者たちによる列伝によれば、デチャンスキは、人質としてコンスタンティノープルに滞在中、ヒランダル修道院長であったダニール二世に書簡を送り、「自分が虜囚として、また大きな悪の罪人として、無理に連れていかれ、異国の民に与えられた」こと、「自分はそのような処罰を受けるような者ではなく、無実である」ことを伝え、「自分の、神から授かった国に連れ戻してくれる」よう、求めた。そこでダニール二世は、ヒランダル修道院の主な修道士たちと話し合い、セルビア大主教ニコディムにデチャンスキの願いを伝えた。大主教はミルティン王にこれを報告すると、王は、デチャンスキの帰国を認めた³⁶。この後、王は「栄光の都コンスタンティノープルにいる、敬虔なるギリシア人の皇帝アンドロニコス陛下」に、使節を派遣して、自分の息子を帰国させるようお願い出ると、「普遍皇帝」は、使節の到来を喜び、デチャンスキに必要な物をすべて与え、帰国させるよう命じた³⁷。

ミルティン王がなぜ、デチャンスキの帰国を認めたのか、についての更なる検討は必要であろう。しかし、以上の記述からは、10世紀のような、「皇帝の命」にもとづきアルコン＝ジュパン任命権を行使していたビザンツ皇帝の姿はみられない。帰国までの経緯の中で、主導権を握っていたのは、史料をみる限りでは、デチャンスキとダニール二世、そして大主教ニコディムであるようにみえる。しかし、この、人質供出義務じたいが14世紀にも存続したことから考えれば、君主伝の記述からうかがうことはできないが、この出来事にビザンツ皇帝の何らかの意向が働い

³⁴ *Ibid.*, 126.

³⁵ Данилови настављачи, Данилов Ученик, други настављачи Даниловог зборника, Г. М. Данијел (ed.), Л. Мирковић (trans., in Serbian), Београд 1989, 28.

³⁶ *Ibid.*, 29-30.

³⁷ *Ibid.*, 31.

た可能性はあるのかもしれない。

いずれにせよ、9世紀から14世紀における、ビザンツ皇帝の南スラヴ諸族にたいする上級支配権の全容については、また稿を改めて論じる必要がある。ここでは、14世紀になると、従来の「皇帝の命」にもとづく、無前提の上級支配権の行使は、従軍要請にかんしては「同盟」や「援軍派遣の要請」といった形に置き換えられる事例がみられるようになったこと、そして、そうした状況の中でも、従来の上級支配権の一部がおそらく残されたと推測されること、を確認しておきたい。1312年のアジア遠征におけるセルビア軍の従軍にかんするスラヴ側の記述や、人質供出義務の存在は、以上の論を裏づける。

4. シメオンの例

次に、政治統合という視点から10世紀前後のビザンツ帝国とブルガリアの関係について、検討したい。その理由は、ビザンティン・コモンウェルス of 政治的な求心力や規制力が、この時期のビザンツと第一次ブルガリア帝国の関係によくあらわれているからである。

この問題については、近年にシェパードが論文「ブルガリアのシメオンー平和の守り手」のなかで考察している³⁸。シメオンについては、オボレンスキーの論では、コンスタンティノープルにおいて「ローマ人の皇帝」として即位するという、その政治目標が不可避的なものとして扱われているようにみえる。しかしシェパードは、一次史料にもとづき、ファイン Jr. ならびにボジロフの見解も踏まえ、こうした論に多様性をもたせようとしている。たとえば、コンスタンティノープル総主教ニコラオス一世ミスティコスからシメオンへの書簡には、シメオンが先におこなった対ビザンツ戦争のことで、「昼も夜も神に祈るのをやめない」といった記述がみられる³⁹。また、ベシェヴリエフが取り上げたブルガリアのギリシア語印章に、ビザンツ宮廷において皇帝賛美のためになされた歓呼儀礼を模して、「平和を守る皇帝〔シメオン〕よ、御代とこしえにあれ」という文言がある⁴⁰。こうした例からシェパードは、シメオンは、好戦的な君主ではなく、ビザンツとの和平を維持することも「真の政治プログラム」であったと指摘する⁴¹。このように、ビザンツ帝国との関係における、シメオンの意図（や心情）については、まだ多様な解釈の可能性が残されているように思われる。

7世紀以降、ブルガリアは領土を約二倍に拡大していた。それは、帝国領の東部でユスティニ

³⁸ Shepard, "Symeon of Bulgaria.", 1-53.

³⁹ ニコラオス一世からシメオンへの書簡、第5書簡。Nicholas I Patriarch of Constantinople: Letters, R. J. H. Jenkins, L. G. Westerink (eds., trans.), Washington D. C. 1973, 34-36.

⁴⁰ V. Beševliev, "Souveränitätsansprüche eines bulgarischen Herrschers im 9. Jarhundert", in: V. Beševliev, *Bulgarisch-Byzantinische Aufsätze*, London, Variorum Reprints, 1978, chapter XXXIII, 18.

⁴¹ Shepard, *ibid.*, 51-53.

アヌス一世以来の領土を獲得し、国力が充実していたビザンツ帝国に脅威を与えるものであった。ブルガリアとの国境は、ビザンツの首都コンスタンティノープルからそれほど離れていなかったもので、その存在はビザンツ帝国にとって非常に厄介なものであったといえる。893年に首都プレスラフでブルガリア王として即位したシメオンは、913年、924年と二度、コンスタンティノープル遠征をおこない、「ブルガリア人とローマ人の皇帝」と称した。また926年には、ブルガリア総主教座を設立した。

ただし、シメオンは少年時代に人質としてコンスタンティノープルで過ごし、そこで教育を受けている。前章で述べたように、当時のブルガリアやセルビアの支配者は、子弟を人質としてコンスタンティノープルに差し出すのが習慣となっていた。ビザンツ宮廷は、この人質にヘレニズム的な教育を受けさせ、ビザンツにとってより好ましい人物に育てた。そして、その出身国で内乱が発生すると、この人質を新たな支配者として送り込んだのである。

即位後、シメオンはビザンツ帝国に反意を示したが、一方で、ビザンツ文化の導入に努めている。同王の保護下に、ブルガリア人聖職者は多数のギリシア語典礼文書や文学作品をブルガリア語に翻訳した。また、コンスタンティノープルから建築家や工芸職人を招聘し、プレスラフを「第二のコンスタンティノープル」にしようとしている。1073年の写本による、シメオンへの賛美演説書によれば、同帝は「彼ら〔大貴族〕の面前で新しきプトレマイオスのように立ち居振る舞い、〔中略〕あらゆる素晴らしい、聖なる書物を集め、その宮廷をそれらで満たした」とされる⁴²。

こうしたことは、少年時代をコンスタンティノープルで過ごし、ビザンツの政治や文化が自国の発展にとって役立つことを知っていたからこそ、起こりえたと思われる。この意味で、シメオンはビザンティン・コモンウェルスの一員であった。同王は、ローマ人の文化には最高の敬意を払っていたのである。

オボレンスキーは、こうした、ブルガリア君主に内在する二つの傾向を、現代の（つまり、1970年頃の）発展途上国のエリートたちのメンタリティーになぞらえて、次のように指摘する。すなわち、先進国で教育を受けて帰国した発展途上国のエリートは、自分が学んだ国の政治制度や文化の模倣に努める一方で、その政治的ヘゲモニーにたいして民族的反抗を試みる傾向があるが、それと同様のことがシメオンにも起こったのである、と⁴³。シメオンは、一生をつうじてビザンツ文明から強い影響を受けていた。そして、オボレンスキーの解釈に従えば、ビザンツ文明を受容することは、ビザンツの政治的特権を認めることを意味したから、ブルガリアがビザンツに吸収合併されるのは、時間の問題だった。シメオンとしては、ビザンツ帝国と戦うしか

⁴² Симеонов Сборник (по Светославовия препис от 1073 г.), том. 1, А. Минчева, Р. Павлова (eds.), София 1991, 202: являіа са нмъ новыи птоломѣи · [...] · и събора дѣліа многочестныхъ · бжствныхъ кнѣгъ · въсьхъ. シェパードによる、次の論文も参照されたい。Shepard, "The Ruler as Instructor.", 339-358.

⁴³ D. Obolensky, *Byzantine Commonwealth.*, 144.

なかったのかもしれない。だが、近代の産物である「民族主義は〔とりわけ正教世界の〕中世には存在しなかった」。存在したのは、「コンスタンティノープルを中心とする普遍帝国という概念」だけであった。このことから、シメオンが「論理的に選ぶことができた一連の行動」は、自身がブルガリア王国を加えたビザンツ帝国の皇帝になることであった。「それを実現するためにシメオンは、コンスタンティノープルを征服し、自分をその帝座に据えなければならなかった」⁴⁴。

では、シメオンは自分を「帝座に据える」ために、何が必要と考えていただろうか。ここで、コンスタンティノープル総主教ニコラオス一世ミスティコスからシメオンに宛てた書簡を検討したい。ニコラオス一世は912年から925年までの間、一時期を除き、対ブルガリア交渉の責任者であった。シメオンがビザンツへの遠征を開始した913年に、ニコラオス一世は、シメオンの行為を、幼帝コンスタンティノス七世にたいする「ティラニコス」とであると非難している⁴⁵。この言葉は、一般にビザンツでは「皇帝にたいする従属民の無法な叛乱」を意味したが⁴⁶、ここでは、おそらく「(帝位の)篡奪」の意味であろう。このことから、おそらくシメオンが「ローマ人の皇帝」として即位することを望むようになったのは、913年の遠征時からであったと推測しうる。

これにたいし総主教は、書簡によって、ブルガリア王がこのような無法な試みを思いとどまるよう、繰り返し要請している。これについて、オボレンスキーは次のように述べており、その指摘は妥当と考えられる。「総主教の強い抗議は納得できる。〔中略〕ビザンティン・コモンウェルスの一部であるキリスト教徒の一君主が、その正統な指導者がコンスタンティノープルにいるところの、諸国家が形成する“普遍的”な社会において最高の地位を要求したことは、一度もなかったからである」⁴⁷。

シメオンは、何を求めていたのだろうか。それは、921年に書かれた第19書簡によくあらわれている。この書簡は、ビザンツ皇帝ロマノス一世ラカペノスが自分の娘をコンスタンティノス七世と結婚させ(919年5月)、共治帝として即位した(920年12月)後に書かれている。つまり、この段階でシメオンが「ローマ人の皇帝」として即位することはまったく不可能となったのであるが、シメオンはそれにもかかわらず、以前と同様に、それを望んでいたことがうかがえる。

「ローマ人の貴族と市民があなたを皇帝、主人と認めるなどと書くのはやめよ」⁴⁸。

「あなたがこの都〔コンスタンティノープル〕に入ることは認められない。あなたが言う、他の要求についても同様である。西方のすべての領土はローマ帝国に属する。だから、こう

⁴⁴ Obolensky, *ibid.*

⁴⁵ ニコラオス一世からシメオンへの書簡、第5書簡。Nicholas I Patriarch of Constantinople: *Letters*, 27.

⁴⁶ F. Dölger, “Bulgarisches Zartum und byzantinisches Kaisertum”, in: F. Dölger, *Byzanz und die europäische Staatenwelt*, Darmstadt 1976, 147.

⁴⁷ Obolensky, *ibid.*, 148.

⁴⁸ ニコラオス一世からシメオンへの書簡、第19書簡。Nicholas I Patriarch of Constantinople: *Letters*, 129.

したことを望むのはやめよ。そして、我らがもっとかなえてやれそうな、神の名においてあなたのためになりそうなことを申し出るがよい」(第27書簡、922-923年)⁴⁹。

第27書簡にみられる、「あなたがこの都に入ることは認められない」という言葉は、どう解釈できるだろうか。前後の文脈から考えて、シメオンは、何らかの意図をもってコンスタンティノープルへの入城を求めたと推測される。

4世紀以後のビザンツにおける皇帝の後継者選出の過程は、次のようであった。①元老院による皇帝候補者の選出、②馬車競技場における市民、軍隊の承認、③宮廷または市内主要教会におけるコンスタンティノープル総主教による戴冠(なおそのさい、新皇帝はここで元老院議員その他の高官による賛同を受けた)⁵⁰。

以上の皇帝選出のプロセスを踏まえると、第19書簡にある「貴族」はコンスタンティノープルの元老院議員に、そして「市民」は同都の市民に一致することが分かる。シメオンは、人質としてこの都で少年時代を過ごしており、ビザンツ皇帝となるためには、以上の過程を経なければならないことを知っていたと推測される。そうであるとすれば、シメオンが同都への入城を求めた理由は、まさに以上のプロセスをビザンツ側に実行してもらいたかったからではないだろうか。前掲書簡の検討にもとづき、デルガーがすでに、シメオンの二度にわたる遠征の目的は、元老院、市民、軍隊による承認をえることであったと結論を下している⁵¹。ただし、そのさいシメオンの目的が、正帝としての即位にあったのか、共治帝としての即位にあったのかは、書簡からは明らかではない⁵²。

また上述の、ニコラオス一世の言葉、すなわち「西方のすべての領土はローマ帝国に属する」という表現から、シメオンが帝国領の分割を要求したことが分かる。この点について、デルガーは、ここでシメオンが、かつてローマ帝国が分割統治された例に倣い、コンスタンティノープルの皇帝と同等の立場にある皇帝として西方領の割譲を要求したと述べる⁵³。しかし、ニコラオス一世が、具体的にどの地域をさして「西方」と呼んだのかは不明である。

いずれにせよ、デルガーの見解を踏まえ、次のように言うことができる。シメオンにとって、コンスタンティノープルなしにビザンツ皇帝が存在することはあり得なかった。それは、この君主が、ビザンツ皇帝となるためにはコンスタンティノープルの元老院・市民・軍隊による承認が必要であると考えていたためである。おそらくシメオンの行動や政策を規制していたのは、ビ

⁴⁹ 同、第27書簡。*Ibid.*, 191.

⁵⁰ 渡辺金一『コンスタンティノープル千年—革命劇場—』岩波新書、1989年、94-95頁。

⁵¹ F. Dölger, *ibid.*, 150.

⁵² なおシメオンは、913年にコンスタンティノープル市壁の外で総主教ニコラオス一世の手により、帝冠ではなく、総主教冠を頭上に戴いたエピソードが伝えられている。これについては、次を参照されたい。R. J. H. Jenkins, "The Peace with Bulgaria (927) Celebrated by Theodore Daphnopates", in: R. J. H. Jenkins, *Studies on Byzantine History of the 9th and 10th Centuries*, London, Variorum Reprints, 1970, chapter XXI, 287-303.

⁵³ F. Dölger, *ibid.*, 151.

ザンティン・コモンウェルスであり、キリスト教世界の支配者はコンスタンティノーブルにいる「ローマ人の皇帝」ただ一人であるという理念であったのだろう。ただ、シェパードの論が示唆するように、こうした理念が、どの程度までスィメオンのじっさいの行動や意識を規制していたのかについては、慎重に検討しなければならない。894年における、スィメオンとビザンツ帝国の最初の戦争から、同帝が没した927年にいたるまでの期間に、ビザンツ帝国とブルガリアの双方がそれぞれの局面においてどのように対応したかについて更なる考察が必要とされる。

5. ビザンティン・コモンウェルスと周辺諸君主のコンスタンティノーブル遠征

では、他の君主はどうであろうか。南スラヴ人の君主で、「ローマ人の皇帝」、あるいはそれに類似する称号を用いた君主は、他にも、ブルガリアでは、イヴァン・アセン二世、イヴァン・アレクサンダル、セルビアではドゥシャンがいる。彼らも、「ローマ人の皇帝」となるためにコンスタンティノーブルの存在を必要としたであろうか。

14世紀におけるセルビア王国の君主であるドゥシャンとビザンツの関係についてみると、次の点が指摘できる。

まず、ドゥシャンは約二十年（1331-1355年）の統治期間の大部分を対外遠征に費やしたが、管見の限りでは、ビザンツ軍との正面戦争は避けたように思われる⁵⁴。バルカン南部を対象として10回以上の遠征をおこなっているが、その目的はおもに、マケドニア、トラキア、エピロスにおける土地の獲得であった。

次に、ドゥシャンはじっさいにはコンスタンティノーブル遠征をおこなっていない。この点については、ファイン Jr. が取り上げているので、まず、それについてみる⁵⁵。ドゥシャンは1355年に死去したが、翌年1356年にコンスタンティノーブル遠征を計画していたと主張する何人かのセルビア史家がいるのにたいし、ファイン Jr. は、フロリンスキーの見解を引用しつつ、そのようなことを示す一次史料がないと説く。そして、14世紀半ばのビザンツ帝国はセルビアの状況に関心を寄せており、両国の文化や外交上の交流は活発に行われていたので、ドゥシャンがそのような遠征を企てていたとすれば、それがビザンツ側に漏れないとは考えにくい、と指摘している。そしてビザンツ人がドゥシャンの計画について知っていたとすれば、ニケフォロス・グレゴラスやヨハネス六世カンタクゼノスがそれを記さないことはなかっただろう、と述べる⁵⁶。

また、ドゥシャンの同都への遠征について記しているのが、ルカーリの英雄叙事詩（1605年頃）

⁵⁴ J. V. A. Fine Jr., *The Late Medieval Balkans: A Critical Survey from the Late Twelfth Century to the Ottoman Conquest*, Ann Arbor 1987, 336.

⁵⁵ *Ibid.*, 335-336.

⁵⁶ *Ibid.*, 335.

と、オルビニによる年代記『スラヴ人の王国』（1601年）といったように、後代の史料であることも、以上の見解を補強する事実として、ファイン Jr. はあげている⁵⁷。ここでは、『スラヴ人の王国』から、関連する記述をあげておきたい。ドゥシャンの死去について、オルビニは次のように記している。

「〔ドゥシャンは〕ロマニヤ〔ビザンツ帝国領〕のジャヴォロポット〔ディアポリス〕に滞在中、熱病に襲われた。あらゆる治療が施されたにもかかわらず、回復することはなかった」⁵⁸。

先にあげたルカーリも、ドゥシャンがトラキア地方のディアポリスで死去したとしているので⁵⁹、このセルビア王がコンスタンティノープル遠征中に熱病で死去したとする伝説が17世紀初めにバルカン半島の西部で流布していたことはたしかと思われる。しかしこれらの史料は、後代のものであり、14世紀半ばには、じっさいにドゥシャンがそうした遠征をおこなったという史料はない。ただし、ファイン Jr. は述べていないが、ドゥシャンがそのような遠征計画を立てなかったというわけではないことについても、触れておく必要があると思われる。ドゥシャンは、1350年にヴェネツィアにコンスタンティノープルへの共同での遠征を提案し、そのさいに同都をどう分割するかについても述べているからである⁶⁰。

ただ、それにもかかわらず、スィメオンが遠征をおこなった10世紀と、この14世紀のセルビアでは、いくつかの相違点がある。たとえば、ドゥシャンの場合、コンスタンティノープルにおける元老院と市民、軍隊による承認や、コンスタンティノープル総主教による戴冠を求めたという証拠はない。スィメオンと同様に、ドゥシャンも少年時代を人質として暮らしており、当時のビザンツ皇帝が即位時にどのようなプロセスを経なければならなかったかについて知っていたと考えられる。しかし、スィメオンの例と異なり、そのような「無法な」要求について、ニケフォロス・グレゴラスやヨハネス六世カンタクゼノスは、記していない。これは、ドゥシャンが、おそらくそうした要求をしなかったからと考えるのが、自然ではなかろうか。

そうであるとすれば、両者の違いは、何に由来するのか。これにはいくつかの要因が考えられる。まず、地理的な位置関係があげられるだろう。ブルガリアはビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルに近接しており、スィメオンは、国土をビザンツ帝国に併合されたいなければ、コンスタンティノープルへ遠征をおこなわざるをえなかった。そのさいの要求が、同都の諸集団による承認という、具体的な形をとったのは、少年時代の体験に加え、地理的な近接性のゆえに、ビザンツ皇帝の選出や即位にかんする情報が、セルビアに比べて伝わりやすく、「ローマ人の皇帝」としての即位をより明確にイメージしえたためではないだろうか。

セルビアは、ブルガリアに比べて地理的に遠かった。また、当時のセルビアの支配層がビザン

⁵⁷ Ibid.

⁵⁸ Мавро Орбин, *Краљевство Словена*, 3. Шундрица (trans. in Serbian), Београд 2006, 42.

⁵⁹ Fine Jr., *ibid.*

⁶⁰ *Listine o odnošajih između južnoga slavenstva i mletačke republike*, III, S. Ljubić (ed.), Zagreb 1872, 174-176.

ツ帝国に併合されるという危機感を抱いていたとは言えない。したがって、同都への遠征はブルガリアの場合のように、政治的緊急性をおびてはいなかった。ドゥシャンが遠征を計画はしたがそれを実行しなかった背景には、こうした要因が考えられるのではないか。

前稿で概観したように、オボレンスキーは、その論文「中世の東ヨーロッパにおける民族意識」のなかで、ビザンツ皇帝の普遍的統治権と、南スラヴ人の民族意識の関係について論じていたが、この問題は、10世紀のブルガリアと14世紀のセルビアとの相違について考えることによって掘り下げることができるのではないだろうか。

中世の民族意識の柱となりうるものとしては、さまざまなものがあると考えられるが、いわゆる「王国共同体」も、その一つといえるのではないか。当時の支配者と大小貴族、そして聖職者によって構成される政治集団も、たとえば「王冠」に忠誠を誓うことによって一定の帰属意識をもつことができ、自分が特定の政治体に所属しているという意識をもつことをうながしえたと考えられる。こうした「王国共同体」が西ヨーロッパ各地で形成されたのは、中世後期のことである。

南スラヴ人のもとには、こうした「王国共同体」は存在したのだろうか。シメオンが支配した10世紀のブルガリアの場合にも、例えば貴族は自分の出身氏族にたいする帰属意識を有していたと推測される。しかし、これらの支配層を繋ぐヨコの政治的紐帯は、国家の組織としては、中世後期に比べ、それほど緊密に発展していたわけではないのではないだろうか⁶¹。中世の西ヨーロッパにおけるそれと比肩しうような、十全の意味での「王国共同体」は、正教世界においても10世紀の段階では形成されるには早すぎたのではないか。オボレンスキーが指摘したような、「中世の〔正教世界における〕民族意識は、〔ビザンツという〕普遍的な世界に昇華されていく」性質のものであったといえるが、それは、まさに10世紀の時期にあてはまるものといえる。言い換えれば、当時のブルガリアの支配層は、ブルガリア人の「王国」や「国家」について、はっきりとした政治的な観念をもちえないままに、強大な君主が主導する対ビザンツ遠征に引き込まれていったのである。

14世紀の場合には、どうであろうか。この時期の西ヨーロッパでは「王国共同体」の形成が各地で進んでいた。当時の南スラヴ人における民族意識や、「王国共同体」と普遍的な世界観との関係はどのようなものであったのだろうか。ここでは、この問題を考えるうえで、示唆を与えてくれると思われる、いくつかの点を指摘しておきたい。

まず、王国共同体については、西ヨーロッパのものと同一視することはできないが、類似のものは、セルビアにも存在した。この点については、すでに他の個所で論じたので、本稿では取りあげない⁶²。この国の支配層には、コンスタンティノープルや「ローマ人の皇帝」以外にも、自

⁶¹ 10世紀のブルガリア貴族は、おそらく氏族制にもとづく社会を形成していた。各氏族を繋ぐ、何らかの政治的紐帯が存在したかどうかについては、検討を要する。さしあたり、次のものを参照されたい。R・ブラウニング『ビザンツ帝国とブルガリア』（金原保夫訳）、東海大学出版会、1995年、271-272頁。

⁶² 拙著『中世後期のセルビアとボスニアにおける君主と社会－王冠と政治集会－』刀水書房、2013年、276-279頁。

身が所属する社会集団がアイデンティティーの拠り所となっていたと考えられる。それが、どのように支配層の政策や行動を規制していたのかを考えるうえで、重要なのは、ドゥシャンの国外への拡大志向を疑問視し、従来の王国観を尊重するように説いた、ダニール二世の弟子たちによる伝記と考えられる（この点についても、別の個所で論じているので、ここで扱うことはしない）⁶³。14世紀には、他のヨーロッパ諸国と同様に、この地でも、普遍的統治権力に依存することなしに、自国の支配権力が政策や行動を決定するさいの指針となることが多くなっていた。この点が、10世紀の状態と異なると思われる。ただし、この地の「王国共同体」に類似の集団は、西ヨーロッパにおけるそれと同じものではないし、集団形成を理論化する政治思想もみられたわけではないが、この点については、稿を改めて論じることにしたい。

第二に、称号の問題も、こうした問題に側面から光を当てることができる。スィメオンが、「ブルガリア人とローマ人の皇帝」と称したことは知られているが、ドゥシャンはギリシア語による文書では称号に「ローマ人」という言葉を付け加えることはしていない。何人かのセルビア史家が論じたように、ギリシア語による称号において用いられているのは、「ロマニア」という名称だけである⁶⁴。「ロマニア」は、ビザンツ帝国領や、その一部をさすときに用いられる言葉であり、普遍的世界観を表す「ローマ人」という言葉とは、一応の区別が必要である。ビザンツ人は、帝国の境界は世界の境界と一致すると考えていた。たとえ現実にはそうでなくとも、時を経て、いずれはそうなるであろうことを信じていたのであった。そして、そうした普遍的世界を支配するのが、コンスタンティノープルにいる「ローマ人の皇帝」である。その意味で、「ローマ人」という言葉は、そうしたビザンツ人の普遍的世界観と不可分の関係にあった。スィメオンが自身の称号に「ローマ人の」という言葉を付け加えたのは、王がこの言葉がもつ意味を正しく認識し、その普遍的世界観にしたがって行動していたからに他ならない。一方でドゥシャンの場合は、「ロマニヤの」という言葉を用いることによって、自分が「ローマ人の普遍的世界」というよりは、ビザンツ帝国の個々の領域の支配者であることを強調したかったのではないか。14世紀におけるビザンツの政治的弱体化を背景に、バルカン半島ではビザンツの普遍的世界は徐々に色褪せ、各地に形成された政治的共同体に細分化されていった。そうした支配集団の目から見た、かつてのビザンツ帝国西方領は、「ローマ人の地」というよりは、領域化され、単純に、ビザンツ人が支配する（またはかつてビザンツ人が支配した）地と映じたのかもしれない。

領域の観念的な把握の仕方も、普遍的な仕方ではなされず、領域ごとになされている。ニケフォロス・グレゴラスの『歴史』によれば、ドゥシャンは、1346年に皇帝として即位したのち、その国を二分し、北半分を息子のウロシュ五世に、南半分を自分が支配したとされる。

「それから〔ドゥシャンは〕国家の全域を息子とともに分かち合った。かれ〔ウロシュ五世〕

⁶³ 同書、276頁。

⁶⁴ 拙稿『『ローマ人の皇帝』と『セルビア人の王国』一辺境からみた二つのローマ』、『中近世ヨーロッパの宗教と政治—キリスト教世界の統一性と多様性—』（甚野尚志・踊共二編）、ミネルヴァ書房、2014年、121-123頁。

にはトリバロイ〔セルビア人〕の習慣に従って、支配をヨンスキ・ザリヴならびにドナウ川から、アクシオスの大河〔すなわちヴァルダル川〕に接するスコピエ市までの地、およびそこから下流へ少し下った地点までを与え、自分にはそこ〔スコピエ市〕からフリストポリスの峡谷の入口までの、ローマ人の地と都市で、ローマ人の生活習慣に従っている地を取った」⁶⁵。

ここでは、ドゥシャンがじっさいに国土を二分して二重統治制を敷いたかどうかが問題なのではない。この君主が、少なくとも観念上は、ローマ人の地とセルビア人の地のあいだに区別があると認識していたことが重要ではないだろうか。この記述は単純に、生活習慣の特徴にしたがって、ローマ人の領域とスラヴ人の領域に分割したとも解釈できるが、筆者は、この立場はとらない。なぜならば、もしドゥシャンがビザンツ人の世界観をそのまま取り入れ、コンスタンティノープルを中心とする普遍的世界だけを念頭に置いていたとすれば、こうした領域の区別は生じなかったと考えられるからである。この二つの区分がなぜ、生じたのかについては、不明である。ただし、現時点では、文中でいう「トリバロイの習慣」が、10世紀ごろのスラヴ人のものと異なり、観念上、集団的な規制が強まった（その要因の一つとして考えられるのは、何らかの政治的共同体の発展である）結果、「ローマ人の地と都市」と区別する必要性が生じたからではないか、という仮説をあげておきたい。

もしそうであるとするならば、バルカン半島の周辺諸君主にとって14世紀は、コンスタンティノープルへの普遍的志向は弱まり、領域化された政治体の中で、支配権の拠り所を地域に求め始めたことになる。ただし、14世紀の伝記作者であるダニーロ二世は、『セルビアの諸王ならびに大主教列伝』のなかで、度々、コンスタンティノープルに座す「普遍皇帝」について言及している⁶⁶。このことからうかがえるように、コンスタンティノープルを中心とする一つの世界が、周辺諸国の支配層の世界観から消え去ることは、ビザンツ末期までなかったと思われる。

以上の論点は、中世後期におけるブルガリアの例を検討することによって、補完されねばならないだろう。14世紀の、第二次ブルガリア帝国の例については、さしあたり、次の点について指摘しておきたい。ドゥシャンとほぼ同時代のブルガリア皇帝である、イヴァン・アレクサンダルは、文書や貨幣で「ブルガリア人とローマ人の皇帝」（ギリシア語文書）あるいは「すべてのブルガリア人とギリシア人の〔この言葉はローマ人に対応する〕皇帝にして唯一の支配者」と称した。イヴァンとビザンツ帝国との関係については、次の点が指摘できる。まず、イヴァンはシメオンと同様に、ビザンツ文化の保護に努めており、多数の典礼文書や文学作品のスラヴ語への翻訳を奨励している。

一方で、イヴァンの場合も、ビザンツ文化の吸収と模倣は、そのままビザンツ帝国にたいして政治的に忠実であることを意味しなかった。イヴァンも、1332年、1364年と二度にわたりビザ

⁶⁵ Nicephori Gregorae byzantine historia, vol. 2 (1830), Bonnae, I. Bekker, L. Schopen (eds.), 747.

⁶⁶ Данилови настављачи, *op. cit.*, 31.

ンツと戦争を行っているからである。こうした戦争は、双方の領土画定にかんする条約の締結をもって終わった⁶⁷。ただし、イヴァンは、ドゥシャンと同様に、コンスタンティノープル遠征は行っていないし、同都の元老院、市民、軍隊の三者による、「ローマ人の皇帝」としての即位承認を求めたということも知られていない。シメオンが「ローマ人の皇帝」の座所はコンスタンティノープルでなければならないと考えたのは、この支配者が同都に居住する諸集団の承認を必要としたからであった。しかし、14世紀に「皇帝」と称したブルガリア、セルビアの二君主が、この称号を用いるための手続きを同都に求めようとしたかどうかは疑問である。今後、この点について、検討を進めていきたい。

以上から、ビザンツが政治的に弱体化した14世紀にも、バルカン半島の南スラヴ人君主にとって、観念上は、その首都であるコンスタンティノープルはいぜんとして世界の中心とみなされていた。だが、以上に述べたことからうかがえるように、その政治的求心力は、陰りを見せていたといえるのではないだろうか。その原因として考えられるのは、帝位争いをめぐる内乱による混乱と、帝国の経済的な弱体化であった。

6. おわりに

オボレンスキーが論文「中世の東ヨーロッパにおける民族意識」の中で論じた、中世の「民族意識が普遍的なものへと昇華していく」過程については、更なる考察が必要と思われる。この論をみる限りでは、オボレンスキーは、こうした過程を中世のヨーロッパ全域に適用しようとしているようである。だが、オボレンスキーがここで扱っているのはおもに正教世界のことであるから、この現象についてはさしあたり正教世界に限定して考えてみたい。コンスタンティノープルは「第二のエルサレム」あるいは世界の中心地として、その政治的・文化的求心力が持続する限り、バルカン半島の諸君主を引きつけてきた。そして、そのことが地域主義の発展に何らかの影響を及ぼした（オボレンスキーの表現に従えば、その発展を遅らせた）可能性はある。ただ、この指摘は、南スラヴ人のもとで国家への認識がまだまとまった体を成さない9、10世紀には妥当といえるが、中世後期の14、15世紀については、条件を付す必要もあると思われる。バルカン半島においても、中世後期には、おそらく他のヨーロッパ諸国に類似する形態での、地域主義あるいは中世的な国家主義が芽生えつつあったということはあるからである。つまり、中世後期にかんしては、「民族意識が普遍的なものへと昇華し、再び民族意識へと収斂していく」過程を、史料から、可能な限りにおいて、抽出する作業が残されていると考えられる。言い換えれば、「第二のエルサレム」であるコンスタンティノープルとともに、バルカン半島各地の支配層の拠点、たとえばトゥルノヴォ（第二次ブルガリア王国の首都）や、ラシュカの地（ネマニッチ家の拠点）が地域的アイデンティティーの根拠となっていく過程を検討する必要があるのかもしれない。

⁶⁷ Fine Jr., *op. cit.*, 274, 367-368.

いずれにせよ、オボレンスキーが指摘したとおり、中世バルカン半島の、正教世界に属する南スラヴ人のもとでは、民族意識は、中世後期の西欧におけるそれと比べて発展は遅く、弱かったと結論づけてよい。オボレンスキーは、西欧のどの点に比してそうだったのかについては述べてはいないようであるし、その原因がビザンツ帝国の普遍主義であったとしても、それがバルカン半島の諸民族にどのように影響を与えていたのかについては、立ち入って検討しているわけではない。しかし、少なくとも西欧の、例えば王冠概念を中心とする王国共同体のような集団は中世バルカン半島にはなかった（ないし弱かった）点は、オボレンスキーの論と整合するように思われる。

[付記]

この論文は、拙稿「『ビザンティン・コモンウェルス』論再考—ビザンツ・東ヨーロッパ世界モデルの可能性—」、『エクフラシス』第9号、2019年、75-91頁、を大幅に修正し、加筆したものです。